

32) 初回手術後2回の再発を切除し、14年を経過した直腸悪性黒色腫の一例

渡辺 隆興・富山 武美(豊栄病院外科)  
生天目信之 (新潟大学)  
(第1病理)

症例は60歳女性。肛門出血を主訴に'86年7月31日当科外来初診。肛門縁より2cm易出血性のポリープを認め8月5日切除。病理にて悪性黒色腫の診断。'88年11月12日右下腹部痛出現。回盲部に腫瘤を触知、11月21日切除。病理では悪性黒色腫の大網転移の診断。'96年9月肛門出血を認め、'97年2月19日当院内科受診。精査にて悪性黒色腫の局所再発。3月4日当科入院。3月10日腹会陰式直腸切除術施行。病理では malignant melanoma al ly 0 v l n l + の診断。Adjuvant chemotherapy として、CDV療法2回施行。術後2年6ヶ月経過した現在外来にて経過観察中で特に再発の所見は認めない。直腸悪性黒色腫は、非常に悪性度が高く術後早期に再発することが多い。本症例は初回手術より2回の再発を認め切除し、長期生存をえた症例である。若干の文献的考察を加え、報告する。

33) 外傷性緊急開腹症例の検討

太田 一寿(財)太田綜合病院附属  
太田西ノ内病院外科

当院は第三次救急病院で、救急車の数も多く平成11年は1日平均9.0台であった。その1/3強は外傷で、緊急手術が行われる例も多い。

そこで、平成5年から平成11年9月までの外傷性緊急開腹症例110例につき検討した。

男81例、女29例、10代から70代までみられた。内訳は交通事故70例、その他の事故21例、銃刀器によるもの19例であった。

開腹の原因は、出血70例、穿孔19例、出血と穿孔13例、その他8例であった。出血部位は肝臓、脾臓、腸間膜が多く、縫合止血や切除された。穿孔部位は胃から大腸まであり、縫合閉鎖や部分切除が行われた。

20例が死亡した。17例は術死で、3例は数日後呼吸不全などで死亡した。生存例の1/3以上は、5日以上の呼吸器管理を必要とした。

症例を数例提示する。

34) 当院での80歳以上消化器外科手術例の検討

篠川 主・末広 敬祐  
大日方一夫・鰐淵 勉(南部郷綜合病院)  
佐藤 巖 (外科)

【目的】当院での消化器疾患の高齢者手術例の推移と経過を検討し、臨床上の問題点を検討した。【方法】1981年1月1日から1998年12月31日まで当院で経験した80歳以上の消化器手術例(局所麻酔下手術例を除く)246例を6年毎に前期、中期、後期、に分類し、各々の手術内容を分析した。【成績】80歳以上の消化器手術数(悪性疾患数:良性疾患数)は前期:56(26:30)、中期79(48:31)、後期:111(48:63)だった。85歳以上の悪性疾患(術後在院死亡例)は、前期:6(2)、中期:13(2)、後期17(2)例だった。【結論】高齢者の消化器手術は悪性疾患、良性疾患手術例とも増加していた。超高齢者の悪性疾患手術例でも近年在院死亡の割合は減少しており、高齢者でも手術は治療上重要な選択肢であると考えられた。

35) 消化器癌術後 MRSA 骨髄炎を合併した2症例

黒崎 亮・佐藤 攻(信楽園病院)  
清水 武昭・若井 俊文(外科)  
山本 智章 (同 整形外科)

消化器癌術後発症した MRSA 骨髄炎を2例経験したので報告する。【症例1】術前より慢性腎不全にて透析を繰り返しており、喀痰培養にて MRSA が検出されていた。胆管癌の診断にて胃幽門輪温存臍頭十二指腸切除術施行。術後2ヶ月して発熱。左鎖骨 MRSA 骨髄炎であった。open drainage にて軽快。【症例2】胃体部癌の診断にて幽門側胃切除術施行。術後左横隔膜下 MRSA 膿瘍を形成したが軽快。1ヶ月後腰痛出現。第9、10胸椎を中心とした MRSA 骨髄炎であった。椎体切除・後方固定術を施行した。【まとめ】臨床上極めて重要であるが、その報告は少ない。MRSA 敗血症後、MRSA 骨髄炎を合併した症例を若干の考察と共に報告した。